

山と博物館

第42巻 第10号 1997年10月25日

大町山岳博物館

企画展

稜線からのメッセージ — 竹村昭八 写真展 — (10/25~11/16)



初冬の鹿島槍ヶ岳

撮影 竹村 昭八

竹村昭八写真展開催にあたって
大町山岳博物館

竹村昭八さんは、二十年にわたり槍ヶ岳の種池山荘の番をする「種池の主任さん」です。

爺ヶ岳(二六六九m)は北アルプスの山々の中でも、とりわけ短時間で登ることができる山で、大町の扇沢から柏原新道、種池山荘を経由して標準四時間前後で着いてしまいます。衆といっても新道の最後の登りは苦しく、樹林帯を抜け、お花畑の向こうに見える種池山荘の三角屋根は、もうひと踏ん張りの目標となります。

息の整わぬまま山荘の戸口をくぐると、頼もしい竹村さんがニコニコして出迎えてくれます。爺の稜線に辿り着いた安堵感は、竹村さんの顔を見て初めて湧いてくる。……そんな存在感のある人です。

写真歴も二十年に及びます。

爺に腰を据え、山岳写真の大家、田淵行男先生の言葉「一山百楽」を地で生き、撮り続けてきました。

竹村さん初の写真展が実現しました。雲湧く鹿島槍、残照の剣岳、草花やライチョウ、雲海の稜線……。長い愛着の眼差しをとおして撮影された作品は、どれもが竹村さんのように頼もしく、濃密な感動と存在感に満ちています。

十月二十五日から十一月十六日の間、山岳博物館の講堂で開催し、入場は無料です。(十一月十日の月曜日は休館)

ご高覧のほどよろしくお願い申し上げます。

鹿島槍に魅せられて

竹村 昭八

私の生いたち

私は昭和九年（一九三四）、大町の隣、美麻村の高地に生まれて、昭和四十八年まで住んでいました。八十戸近くの集落でしたが、現在は過疎のために全滅しています。

高地での生活は、今では考えられない事ばかりでした。荷物を背負ったり、歩く事が当たり前で、それが出来なければ暮らしていけない所でした。傾斜地の畠仕事も、すべて手作業でした。

美麻村は山間に点在する集落が多いため、小中学校（当時は国民学校と高等科）が、南北に一所ずつと分教場が二ヶ所あり、そのひとつが高地にありました。三年間分教場で学



生まれ育った美麻村高地地区神出の集落（昭和47年撮影）

び、四年から本校に通いました。高地の半数に近い南部の子供達は、若栗峠を越えて一時間ほど歩いて通ったのです。

峠からの後立山の展望は、天気さえ良ければそれは見事で、思わず立ち止まってしまふほどでした。しかし冬ともなれば、大きな雪崩だと思いますが、不気味な轟音がこだまして聞こえて来ることもありました。年寄が「西岳の雪おろしの音だ」と話すのを、こわごわ聞かされたものです。様相を一変した雪山は、神秘的で近づきたいものがありました。そのような岳に、仕事でこれほど長く関わるようになる事など考えもありませんでした。今もたまに植林の手入れなどで高地を訪れ



若栗峠から見た鹿島槍・爺ヶ岳

る事があります。大町から車で二十分ほどで行けるようになりましたが、若栗峠からの後立山の眺めは少しも変わっていません。峠に立つ筆塚も、空洞になっている大きな梨の木も当時のままです。

高地に入れば、畠に植林した木も大きくなり、芽ぶきの家はみな崩れ落ちて不気味なほどです。それを見るたびに、どうしてもあの忌まわしい戦争当時の暮らしを思い出してしまいます。しかし、昔のままの川の流れと、子供の頃の日課だった水汲みの沢の水音にはほっとします。

貧しい生活でしたが、今より時間的にはもっと余裕があった様に思います。大町にも大勢高地から出た人達が住んでいますが、会えば当時のなつかしい話が必ず出て来ます。

岳との出会いと歩荷

農閑期を利用していろいろな仕事をした中に、山小屋への荷上げがありました。岳には学校登山で燕岳に登ったことがあるだけで、不安いっばいで冷池小屋（現冷池山荘）への荷上げを引き受けました。昭和三十四年（一九五九）のことです。

荷上げは、七月の小屋開きに合わせて、六月の十九日頃と決まっていました。先代の柏原長寿さんもまだ元気でした。明日からの仕事の話を聞きながら一杯御馳走になって、皆一緒に部屋で期待と不安の一夜を過ごしました。

翌朝、トラックに荷物を積み込み出発準備の出来たところで、おばあさんがお盆に御神酒を乗せて出て来て、「さあさあ怪我のないように気をつけて頼むわい」と気つかってくれました。荷崩れを見るために荷台にも別れて乗り、大谷原に向かいました。長寿さんは途中の鹿島山荘に寄って挨拶していききました。有名だった鹿島のおばあも元気でした。大谷原には作業小屋の様な建物があり、それを借りて荷上げの終わるまで泊まることになりました。



雲海（爺ヶ岳南峰より）



8月のお花畑（種池付近）



晩秋の剣岳

帰りは尾根道を下る言われていたが、西沢をグリセードで下るのが病みつきになりました。尾根を下る人達より早いので、山菜さがして時間をつぶし、皆と合流してからは川流の水を少しずつ拾って、長寿さん達の待つ大谷原に帰りました。

天気さえよければ荷上げは一週間くらいで終わりました。最終日は長寿さんも一緒です。「俺の妾だ」と言っていた焼酎を水枕に入れて、年季の入ったリュックを背負い、ももひきの前掛け、はつぴにねじり鉢巻きの身支度でした。残雪の上を地下足袋をぬらさないで登っていたので、歩き方が上手だと言ったら、「ぬればつめてえでな」と、にこにこしていました。

次は冷池小屋をベースに種池小屋（現種池山荘）までの歩荷です。棒小屋沢から吹き上げる風に雨が横なぐりに顔にばちばちとたたきつけて、目も開けられない様な時もありましたが、下から上げた事を思えば稜線歩きは快適でした。一日二往復出来ました。夕方剣、立山はまた格別でした。全部終われば、種池小屋に二代目の正泰さん達、冷池小屋に長寿さん達を残して下山です。まだ新越に小屋のないころの事です。歩荷は昭和三十七年まで続けました。

初日は足ならしに軽荷で登り、二日目から本格的に始まりました。西俣合合までも今の様な車道はなく、人の歩けるだけの道が川沿いになりました。平均三、四十キロは背負ったでしょう。大町山の会や大町高校の山岳部の人達に、トレーニングを兼ねて途中から応援してもらったこともありました。その頃は赤岩尾根もにぎやかで、フアイト、ガンバの掛け声に私達も活気づきました。樹林帯をぬければ高千穂平にです。そこで対面した鹿島槍の雄姿は強烈でした。その後の長い山との関わりも、この出会いがあったからです。苦しい大変な仕事でしたが、鹿島槍は毎日違う姿で迎えてくれました。

道々小鳥のさえずりに勇氣づけられ、可愛い花に慰められて、冷乗越の稜線に出ます。棒小屋沢を隔ててそびえ立つ剣、立山三山の眺めはすばらしく、思わず疲れを忘れさせてくれるほどでした。

写真を始めて

昭和五十年（一九七五）から冷池や種池山荘で働くようになり、山にきたプロ、アマ大勢の写真家の人達と知り合いになりました。それらの方々は限られた日数でしか来れませんが、「山荘で働いていれば、はるかいいチャンスに会えるだろうから、どんどん撮りなさいよ」と勧められて、その気になりました。

基礎の勉強は何もやっていない中、人に戴いた山岳写真の写し方の本を片手に、中古の中判カメラで翌年から夢中で撮り始めました。しかし、限られた山域だけで済んだので、よくワンパターンだと言われてばかりでした。現像の上がりを楽しみに待っていたのに裏切られてばかりで、恥ずかしい失敗もくり返して来ました。撮り直しに次の年出掛けてみると、以前のように花が咲いていなくてがっかりだったり、コバイケイソウなどは何年かの周期でしか花をつけてくれません。紅葉もそうです。雨の中で終わってしまったり、雪が来て一気にだめになった年もありました。現場にいるのだからいつでも撮れる、もつといチャンスがあるだろうと、のんきにしてい



鹿島槍初冬

て何も撮れずに終わったシーズンもありました。山では出合った時がチャンスだと言われているが、その通りだと思えます。

今は亡き田淵行男先生がお元氣だった昭和三十四年頃、種池や冷池小屋をベースに写真を撮りに登って見えました。小屋でお世話出来た思い出は、限られた紙面で書き切れるものではありません。出版された多くの写真集は写真も文章もすばらしく、感動しました。あの頃写真に興味を持っていたなら、勉強出来たのにと悔やまれます。

まだまだ未熟で、先生の作品のように人に感動してもらえない写真があるだろうかと心配でなりません、目的のないまま撮り、たまたまだけの写真かもしれませんが、山岳博物館のご厚意で、夢もあった写真展が実現しました。紙面をお借りして感謝申し上げます。

また写真家の近藤辰郎氏、増村征夫氏、クリエート現像所の木村和正氏には特にお世話になりました。記してお礼申し上げます。

稜線の異変

長い間見つけて来た稜線ですが、気になる様子が数年前から見られるようになりました。

春山に入山して見ると、ハイマツの葉が枯れて茶色くなっているのです。沢筋の稜線に多く見られます。それに雪どけを待つ冷池や種池に産卵に集まって来るクロサンショウウオの数が少なくなってきました。種池では無精卵が多く見られるようになってきています。

どちらも酸性雨の影響ではないかとのことです。もしそうだとしたら早いうちの手を打たなければならぬと思います。小屋番一人の声などどこまで届くか知れませんが、残念でなりません。このすばらしい大自然は、美しいままで後世に残していかなければならないと思います。

カモシカは新天地を求めて

千葉 彬 司

昭和三〇年の初期には、全国のカモシカ生息数は約三千頭と言われていた。

カモシカが増えなかった大きな原因は広範囲における密猟であった。このカモシカにとって大きな転機が訪れたのは昭和三十四年のことである。

岡山県に端を発した密猟の取り締まりは全国に波及し、検査者は二千人、密猟されたカモシカの数は過去四カ年で二千頭にもなった。

その後の取り締まりの厳しさと、貴重な天然記念物に対する保護思想の普及により、現在ではその数は約十一万頭と言われるまでに増えた。

その生息頭数の増加はやがて植林幼齢木や農作物に対する食害といった形で現れ、大きな社会問題に発展したことは周知のとおりである。その対応策として防護策の設置や忌避剤の塗布等が実施されたが、食害の激しい岐阜、長野県の両県では昭和五十三年から毎年捕獲が行われ、平成元年から愛知、平成二年からは山形県が加わり捕獲数は一万頭以上のほり現在も続いている。

カモシカの生息数の増加はここ北アルプス山麓でも例外ではなく、山麓の林道、時には農耕地にまで出没し人々を驚かせている。大町市でも北アルプス山麓側では植林幼齢木に食害があり捕獲が実施されているが、市街地を挟んで東側の山地には昔からカモシカは生息していなかった。

しかし、最近ではこの東側の地域でカモシカを見かけたという情報があり、大町市の居谷里地籍で、桜井元さんが平成五年五月十九日にかなり高齢のカモシカの写真を撮影されている。これまで東山地籍でカモシカの情報はしばしば耳にしたが、写真撮影されたものとしてはおそらく初めてのものであろう。

このようにかつてはカモシカの生息が確認されていない地域からの情報が時々はいく。



東側山地でのカモシカ観察

市町村	観察年	場所	観察例	観察者
大町市	1993.5.19	居谷里	◎	桜井 元
白馬村	1997.3.20	内山	◎	伊藤 馨
	1997.6	北城中込	△	長沢 武
小谷村	1980.2	大綱	◎	平川才司
	1982.1	立山	◎	平川才司
	1982.1	李平	◎	平川才司
	1989.2	三ヶ村	◎	平川才司
	1991.3	耳尾沢	◎	小林 惇
	1991.3	大渚山	◎	鷺沢善和
	1991.4	岩戸山	◎	松沢文夫
	1992.1	神久	◎	小林守男
	1992.1	立山	△	猪又 斌
	1992.2	耳尾沢	◎	小林守男
	1992.3	大草蓮	◎	小林守男
美麻村	1992.3	立山	◎	山田昌規
	1992.4	大綱	◎	鷺沢善和
	1985年ころ	池の平	◎	酒井周一郎
	1988.8.25	大塩日影	□幼獣	北沢繁美
	1996.5.27	片岡沢	△	清水博文
	1996.5.28	高地沢	△	千葉彬司

◎ 目撃 △ 足跡 □ 保護

大町市の隣村の白馬村やその隣の小谷村の両村も、姫川を挟んで東側の山地には元来カモシカが生息していた記録がなく、昭和五十一年に長野県下のカモシカの生息域の調査を行った際にそれらの地での生息は認められなかった地である。

白馬村では平成九年三月に一頭が民家の前に出現、小谷村では昭和五十五年を目撃されたのを皮切りに、年を追うに従い各地で鳥獣保護員や猟友会の何人かのメンバーによって目撃されたり、足跡などが観察されている。

このような状況はこれらの地域よりさらに東に位置する美麻村でも見られ、昭和六十年ころ野兎駆除を行った際に池の平で猟友会の人が見かけている。また、昭和六十三年八月二十五日には大塩日影で工事をしていた作業員がカモシカの幼獣がうすくまっていたのを発見し、連絡を受けた当時の大北猟友会長の北沢繁美さんが山岳博物館に運び込んだ。しかし、衰弱が激しく翌日死亡してしまい、現在は剥製となって美麻村役場に保管されている。

その幼獣が当才子であったので保護地近くに母親がいるのではないかと聞いてみたが見つけることはできなかったそうである。近年カモシカはその生息分布域を確実に広めてきているようである。一定の面積のナフバリを持ち生活しているカモシカは、生息数の増加にともない限られた生息環境から出て新しい地に生息域を求めて移りつつあるのではあると思う。

このような現象がその地の自然環境や、人々の生活にどのような影響を及ぼすのか、長い目で見続ける必要があると思う。

(大町山岳博物館顧問)

山と博物館第42巻第10号

発行 一九九七年十月二十五日発行

発行 千歳長野県大町市大字大町八〇五六―

大町山岳博物館

TEL 〇二六―一三三〇二二

印刷 大糸タイムス印刷部

定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号〇〇五四〇七七一三三三三